



北西から見た十二湖崩れ



十二湖の日本キャニオン

地震がつくった十二湖の自然

江戸時代のことです。現在の深浦から能代にかけての地域を、大きな直下型地震がおそい、数十人の死者が出ました。能代ではほとんどすべての家が倒れたり火事で焼けましたし、八森では、150〜160軒程の家のうち壊れなかったのは5〜6軒だったそうです。これが、1704年（宝永元年）5月27日におこった岩館地震（マグニチュード7前後）です。ご心配の方がいるかもしれませんので念のためご説明しますが、もし同じ地震が起こっても、八峰町ではこれほどの被害はないでしょう。最近の家屋は江戸時代のものより丈夫ですし、八峰町は地盤が良いからです。

その地震の時、今の十二湖の所で大きな地すべりが起こりました。地震でユサユサゆすられているうちに、山がドツとすべるように崩れ落ちてしまったのです。十二湖の奥にある「崩山」がそのあとで、崩れた地形全体を十二湖崩れといえます。では、崩れた土砂はどこにいったのでしょうか？

今、十二湖に行くとき青池などたくさんの美しい池を見ることが出来ます。実は、そのあたりはすべて地すべりの土砂で埋めつくされた場所なのです。青池から日本キャニオンのあたりまで、東西2キロメートル、南北2・5キロメートルの広い範囲に、厚さ数十メートルもの土砂がたまっています。これが全部地すべりによるものなのです。その量は1・1億立方メートル、ざっと東京ドーム100杯分程の巨大な量です。

青池、鶏頭場ノ池、王池東池、王池西池、大池など十二湖を作る湖はすべてこの土砂の上にあります。地すべりによってすべりおちてきた土砂は上がデコボコです。しかも、地すべり地には水がたつぷりあります（だからすべりやすいのですが）ので、デコボコの地形の低めの所に池ができたというわけです。もちろん、この地すべりは、当時このあたりにすんでいた人に大きな影響を与え、10名の人々が行方不明になったことが古文書からわかっています。

地すべりの土砂の海側のはしは、日本キャニオンです。日本キャニオンは高さ150メートル（これは30数階のビルディングと同じ高さです）。地すべりの土砂は、もともと白くてやわらかい「軽石」や「火山灰」でできています（ホームセンターで売っている鹿沼土と似ています）。たいへんもろい地層ですので、何かとくずれることが多いので、植物のまったく生えない白い崖ができあがったというわけです。

地すべりというと「災害」など悪いことしか思い出さないかもしれませんが、でも、十二湖では、地すべりによって美しい風景ができあがっているのです。地震は必ずしも人間にとって悪いことばかりではありません。良いこともあるのです。

秋田大学教育文化学部教授 林 信太郎

八峰白神ジオパーク推進協議会

〒0182612

秋田県山本郡八峰町八森字ノケソリ116

旧岩館小学校内

TEL 0185-78-2427